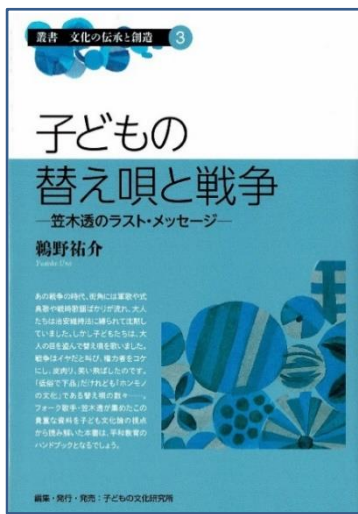


うたとかたりの対人援助学

第15回 『子どもの替え唄と戦争』 こぼれ話

鶴野 祐介



今年8月、『子どもの替え唄と戦争 ―笠木透のラスト・メッセージ』(子どもの文化研究所)を出版しました(2,000円+税)。本連載の第2回「戦争と替え唄」にご紹介した内容をふくらませたものです。「軍歌」「唱歌・童謡・わらべうた」「大人の流行歌・民謡・外国の歌」の3つにジャンル分けした52曲を元歌とする子どもの替え唄を元歌の歌詞と楽譜付で解説と共に紹介する「第一部 テキスト篇」、〈子どものコスモロジー〉〈音楽社会史〉〈ライフヒストリー〉という三つの視点から、戦時下を生きた子どもたちにとって替え唄を歌うことの意味とは何だったのかを問う「第二部 研究篇」からなっています。「子ども文化論の新たな地平を切り拓く鎮魂の書」(表紙カバー見返し)として、また平和教育のハンドブックとして手に取っていただければ幸いです。今回は、本書の中には盛り込めなかったエピソード

ドをこぼれ話としてご紹介するとともに、この研究の今後の展望を書き留めておきたいと思えます。

なお、以下の文章の中では、作者(作詞者・作曲者)が特定されるものを「歌」、作者不詳のものを「唄」、両方の意味を含むものを「うた」として記述します。

「替え唄」という認識はいつ生まれた？

本書の出版にあたって、日本音楽著作権協会に歌詞および楽譜の掲載申請をしたところ、18曲に著作権が発生し、1曲につき原則1,050円、合計約2万円を支払うことになりそうです(金額の確定は数か月先のようなので)。この中には19世紀のアメリカ民謡「ジョージア・マーチ」も含まれており、なんとも不可解ですが、同協会のHPには「編曲や替え唄、訳詞などにより著作物を改変する場合、著作権(財産権)だけでなく、改変の仕方によっては、著作者人格権が問題になることがあります。人格や名誉に関わる部分を保護する著作者人格権は、著作者だけが持つことのできる権利(一身専属)で、他人に譲渡することはできません。著作権(財産権)の権利者と異なる場合があるので、著作者人格権について了解を得る場合には注意が必要です」云々と記載されており、慎重を期すことにしました。

著作権の問題は、ある楽曲を演奏したり改変したりする場合、原作者の許可を得て、使用料を支払わなければならないという認識を共有し、作品の個性(オリジナリティ)や帰属性(アイデンティティ)が尊重される社会に私たちが生きていることの証左

と言えます。

ただ、歴史を遡ってみると、こうした個別性や帰属性が問われるようになったのは近代以降のことにすぎません。それまでは、「これは替え唄だ」「いや、偶然似ているだけで、オリジナルだ」と言い争う必要もなかったのです。「詠み人知らず」という言葉が示すように、誰が詠んだかはわからなくても、「いいものはいい」として歌い継がれてきたのです。

わらべうたと替え唄

例えば、日本の伝承童謡「わらべうた」には原則として「元歌」も「替え唄」もありません。土地によって、また時代によって、少しずつ違っているけれども類似するうたのことを「類歌」と言いますが、わらべうたにあるのは「類歌」だけです。

大学生に「かごめかごめ」「ほたる来い」「花いちもんめ」などのわらべうたを聞いてもらうと、「どれもよく似たメロディーで、ちょっと不気味」といった感想が多く寄せられます。その理由は、わらべうたの音階の多くが「民謡音階」と呼ばれる「ラ・ド・レ・ミ・ソ・ラ」で構成されているからなのですが、ことばのイントネーションに合わせて、この音階に乗せて唱えれば自然と、よく似た「うた」ができあがるのです。ちなみに「かごめかごめ」と「ほたる来い」の冒頭をドレミで歌ってみましょう。

♪レーレミ レレレ レレレ レドレド ラ…
♪レーレー レドレレ レレレ レミレレ ラ…

今日の子どもたちが聞いたら、どちらかがどちらかの「替え唄？」と思うかもしれません。

唱歌と替え唄

1872（明治5）年に学制が公布され、「唱歌」という科目が誕生しましたが、しばらくの間、教科書はありませんでした。伊沢修二がアメリカへ留学し、音楽教育を学んで帰国した後に作ったのが最初の教科書『小学唱歌集』（1881 - 1884）で、その中には英国やドイツなどの民謡や歌曲を元歌とするもの

が数多く含まれていたことはご存知の通りです。

代表的なものとして「蛍（蛍の光）」を挙げておきましょう。元歌は、旧友との再会と別れをつづった英国スコットランド民謡「過ぎし日（オールド・ラング・サイン）」です。

♪ふるきよき友 忘ることなく 心は永遠に
とどめたし … 過ぎし日のため 友よ
過ぎし日のため 懐かしの グラスを♪

↓

♪ほたるの光 窓の雪 文よむ月日 重ねつつ
いつしか年も 過ぎの戸を
開けてぞ 今朝は 別れ行く

ただし、これを直ちに「替え唄」と呼んでいいかという疑問が残ります。元歌のメロディーを借用しただけで、歌詞については元歌とは関係のないまったく別の内容です。後ほど述べるように、これは文芸的な技巧（レトリック）を用いて元の歌詞を改変し、元歌とのギャップを楽しむ「パロディ・ソング」という意味での「替え唄」ではありません。

軍歌からわらべうたへ

一つのメロディーがテンポやリズムを少しずつ変えながら、そこにいろいろな歌詞が付けられ、またいろいろな場所（状況）で歌われていくということもありました。例えば、フランス人軍楽長シャルル・ルルー作曲、外山正一作詞の「抜刀隊の歌」は、1885年に鹿鳴館で初演された軍歌ですが、当初イ短調だったのが、「ピョンコ節」とも呼ばれる、弾むようなリズムの民謡調に改変されて、お手玉やまりつきのわらべうた「一番はじめは」として、子どもたちの間で広く歌われていきます。

♪われは官軍 わが敵は 天地入れざる 朝敵ぞ

↓

♪一番はじめは 一宮 二は日光の 東照宮
三は佐倉の 宗五郎 四はまた 信濃の善光寺
五つ出雲の おおやしう 六つ村々 鎮守様
七つ成田の 不動さん 八つ八幡の 八幡さん

「一番はじめは」を口ずさむ子どもたちには、「抜刀隊」の替え唄を歌っているという認識はなかったでしょう。ちょうど水面を漕いで進んでいく時の櫓（オール）のように、シンプルでリズムカルなメロディーの繰り返しが、物語を先へ先へと進めていってくれるものと感じられたのではないのでしょうか。

ちなみに、先ほど「わらべうたには原則として元歌はない」と書きましたが、「一番はじめは」は元歌が確認される珍しい例です。ただしこの場合、曲調はかなり改変されているので、「元歌」というよりも「祖型」と呼ぶべきかもしれません。

軍歌⇒社会運動歌・演歌・子ども向け軍歌 etc.

次に、社会性や政治性を帯びた例をご紹介します。1901年または1904年に発表された軍歌「日本海軍」(A)のメロディーは、1904年「社会主義の歌(富の鎖)」(B)に、日露戦争後には演歌師の添田唾然坊が作った演歌「あゝわからない」(C)に、また昭和のはじめには子ども向けの軍歌(水谷まさる作詞)「僕は軍人大好きよ」(D)に、そしてその替え唄「僕は軍人大きらい」(E)になり、さらには韓国・北朝鮮・中国それぞれにおいて愛国や独立などをスローガンとする勇ましい歌詞で歌われました(F、G、H)。

ひとつのメロディーが、ある集団を一つに結びつけ、外へと向かっていく力を持っていること、そしてその力は時として「敵」を打倒する「暴力」にもなることを物語る歴史的事例と言えるでしょう。

A.四面海もて囲まれし わが敷島の秋津洲…

↓

B.富の鎖を解き棄てよ 自由の国に入るは今…

C.人は不景気タタタと 泣き言ばかり繰返し…

D.僕は軍人大好きよ 今に大きくなったなら…

E.僕は軍人大きらい 今に小さくなったなら…

F.鉄腕石拳 意気衝天 われら少年たたかわん…

G.われらは朝鮮人民革命軍 戦う赤き戦闘員…

H.直隸の歴史を遡れば 最古の戦場 涿鹿がある…

ザ・ドリフターズが歌った替え唄

先ごろ、志村けんさんが亡くなられたのをきっかけにして、ザ・ドリフターズが再び脚光を浴びています。彼らの活動の音楽面にも注目が集まっているようですが、戦後の子どもの替え唄を語る時、ドリフの功績の大きさは計り知れません。

志村さんが歌った、童謡「七つの子」の替え唄「カラス なぜ鳴くの カラスの勝手でしょ」はあまりにも有名ですが、「8時だヨ！全員集合」(1969 - 1985)の中では他にもたくさんの替え唄が歌われています。例えば、オープニングテーマは民謡「北海盆唄」が元歌です。

♪ハアア 北海名物 (ハア ドウシタ ドウシタ)

かずかず コリヤ あれどヨ (ハア ソレカラドシタ)

おらがナ おらが国さの コーリヤ

ソレサナ 盆踊りヨ

↓

♪ハアア ドリフみたさに

チャンネル コリヤ 回したら

今日もナ 今日もあえたよ コーリヤ

ソレサナ 五人の色男

一方、エンディングテーマの元歌は、永六輔作詞、いずみたく作曲の「いい湯だな」。デューク・エイセスによる日本各地のご当地ソング「にほんのうた」シリーズの一つで、この歌は群馬県のご当地ソングとして1966年2月にリリースされたものです。

♪いい湯だな いい湯だな

湯気が天井から ポタリと背中に

冷てえな 冷てえな

ここは北国 登別の湯

↓

♪笑ったね 歌ったね

あなたの笑顔が 目に浮かぶ

可愛いな 素敵だな

来週も楽しく 笑いましょう

この歌の最後に、加藤茶さんが画面に向かって「風邪引くなよ」「お風呂はいいよ」「歯みがいたか？」

「宿題やったか？」などと呼びかける場面が忘れられないという方も多いでしょう。

本書『子どもの替え唄と戦争』には、「シャンラン節」や「隣組」のドリフ替え唄版を収めています。

⇒ ♪ ツーツーレロレロ ツーレーロ…

僕があの娘を 見染めた時は
高校二年の春の頃 グレた頃…

♪ド・ド・ドリフの大爆笑
チャンネル回せば 顔なじみ
笑ってちょうだい 今日もまた
誰にも遠慮は いりません…

他にも、スコットランド民謡「ライ麦畑を抜けて」（唱歌「故郷の空」の元歌）の替え唄「誰かさんと誰かさんが麦畑…」など、ドリフの替え唄レパートリーはたくさんあります。

替え唄とパロディ・ソング

こうして見てくると、替え唄は、①元歌の歌詞が意識されており、これをひっくり返したり混ぜ返したりして「替える」ことを意図したものと、②元歌の歌詞はいつでもよく、ただメロディーに魅かれて、これに自分の想いを乗せて歌にすることを意図したものの2種類に分かれるように思われます。

前者のタイプは「パロディ・ソング」とも呼ばれ、戦争中の子どもの替え唄の多くはこちらです。元歌をさんざん聞かされたり歌わされたりしたことに対する対抗措置、ストレス解消法の一つが、替え唄を歌うことだったのです。

これに対して、後者のタイプは、日本だけでなく外国の場合も同じですが、民謡（フォークソング）に多いようです。子守唄もその一つで、例えば「ねんねんころりよ おころりよ」で始まる「江戸の子守唄」のメロディーで歌われる、別の歌詞の子守唄は、西館好子さんによると 200 種類を超えるそうです。元歌の歌詞を「替える」という意識が薄いという点において、厳密には「替え唄」とは言えず、これも「類歌」と呼ぶべきかもしれません。

世界の子どもの替え唄

最後に、子どもの替え唄に関する研究の構想をスケッチしておきたいと思います。1つ目の課題は世界の子どもの替え唄を集めて国際比較をすることです。本書では、替え唄づくりの法則性を、I. 物語の脱構築：(a)錯綜、(b)分裂、(c)中断、(d)解体、II. 物語の再構築：(e)鏡像的世界、(f)反復的世界、(g)祝祭的混沌世界、のように分類し構造化しましたが、このような法則性は、外国の子どもの替え唄にどのくらい共通して見られるのかを探ってみたいのです。

本書の中でも紹介したアイオナ&ピーター・オーピー『イーソーを見た 子どもたちのうた』（1947年）の冒頭に、次のような英国の子どもたちの替え言葉が収められています。新学期最初、校門脇の掲示板などに掲げられた標語をモジったものです。

♪ やれやれ またまた学校か！

やることいっぱい やなこといっぱい

Here we are, back again!

Lots of work and lots of pain. (p.19)

おそらく元の標語の最後は“lots of fun”だったのでしょ。全体では「さあ、学校に戻ってきた！楽しいことがいっぱい待ってるぞ」といった具合でしょうか。“fun”が“pain”に替わるだけでガラリと雰囲気が変わります。そして、どこの国の子どもも考えることはおんなじだなあと嬉しくなります。

その一方で、例えばシリアや北朝鮮やスーダンといった、困難な状況下の子どもたちは果たしてどんなうたや替え唄を歌っているのか気になります。

子どもの替え唄の過去・現在・未来

2つ目の課題は子どもの替え唄の歴史的な変遷（過去）をたどり、今日的状況（現在）を確認し、今後どのようになっていくか（未来）を予測することです。1つ目を共時的的研究とすれば、こちらは通時的的研究と言えるでしょう。2つの課題を達成するまでにどのくらい時間がかかるかわかりませんが、大ぶろしきを上げておきます。どうぞお楽しみに！